神（神）

一三、廣瀨中佐（嚴谷季雄）

神洲男兒かずあれど、

男兒のうちの眞男兒、
世界にしめす鑑とは、
廣瀬中佐が事ならん。
すでに一度死を期して、
旅順封鎖に向ひしが、
事意に滿たぬ無念さは、
ふたゝび結ぶ決死隊。
もとより君に捧げし身、
妻も迎へず子も持たず、
父の寫眞と兄の文、

股肱

これぞはだへの守なる。
かゝる强將上にあり、
下に弱卒などあらん。
中にも杉野兵曹長、
中佐が無二の股肱なり。
上下心を一にして、
入るや虎穴の奥ふかく、
その大任は船底に、
積める石よりなほ重し。
探海燈は、いなづまか、

任務

水雷はげにいかづちか、
中にひるまず悠々と、
行くや名に負ふ鬼中佐。

港口ふさぎて爆沈し、
任務はかくて果ししに、
兵曹長はいかにせし、
姿も見えず影もなし。

「杉野はいづこ杉野よ」と、
呼べど答はあら海に、
こだまと聞くは砲彈の、

本意

船にくだくる響のみ。

三たび求めて三たび得ず、
「かくては君もあやふし」と、
促されつゝ本意なくも、
小舟に移り乘らんとす。

時しもあれや轟然と、
耳をつんざく敵彈に、
血煙船に立ちこめて、
中佐の姿はやもなし。

五尺の體の名殘なる、

千古
寶(宝)

たゞ一寸の肉塊は、
忠血義血俠血の、
千古に朽ちぬ寶ぞや。
あないさましの軍神、
七度人とうまれきて、
わが帝國や守るらん、
わが帝國や守るらん。」